

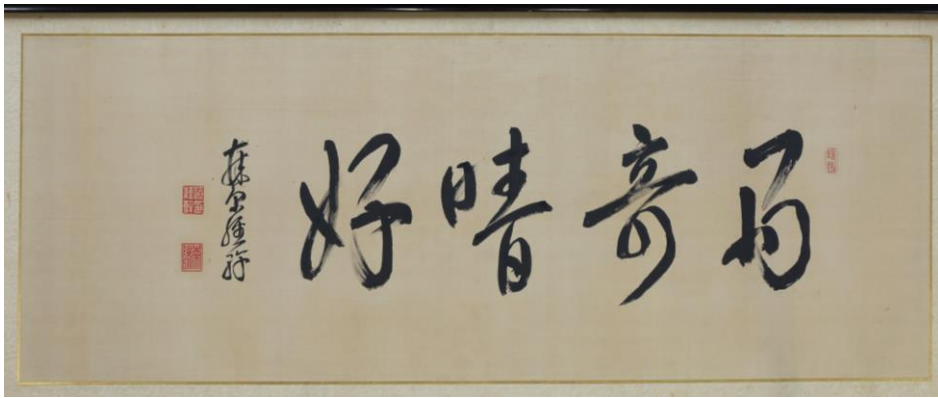
吉川史料館たより

第 6 7 号
2018年
(平成30年)
6月30日
土 曜 日

発行所 吉川史料館

山口県岩国市横山二丁目七―三
郵便番号 七四一―〇〇八一
電話番号 (〇八二七)―四一―一〇一〇

このたびは吉川経幹の書を紹介します。
「雨奇晴好(うきせいこう)」です。



この書は中国宋時代の文学者蘇軾(二〇三六―一一〇一)の漢詩である。「水光激灑晴方好 山色空濛雨亦奇 欲把西湖此西子 淡粧濃抹総相宜」がもとになります。

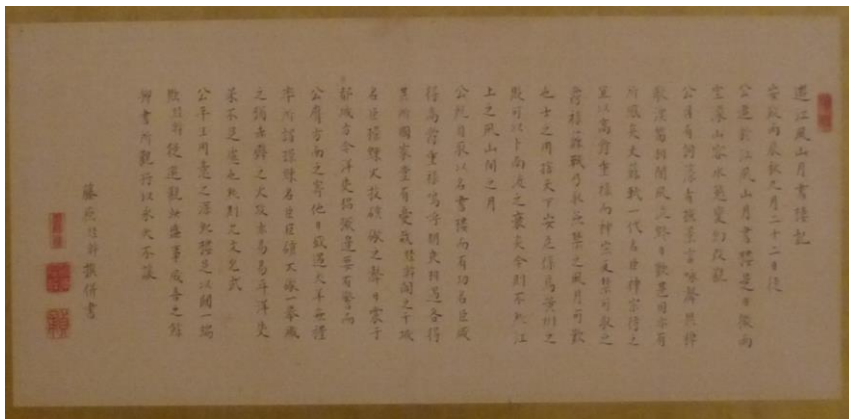
水光 激灑として晴れて方に好し
山色 空濛として雨もまた奇なり

西湖を把つて西子に比せんと欲すれば
淡粧 濃抹 総べて相宜し

意味は、晴天の西湖も雨の西湖もよい、また西湖と西子(西施)と比喻し美人は化粧が薄かろうが濃かろうがよいという意味もあります。西施は中国(春秋時代)の美人のことです。つまり、ものごとを柔軟に考えてという表現なのです。

さて、この書は、安政三年(一八五六)九月、吉川経幹が毛利敬親に招かれて萩において歓待を受けた席にて記したものとされています。この時、小雨が降っており、経幹は蘇軾の漢詩を思いついたと思われます。敬親が経幹を招いたのは友好関係が目的であり、経幹はその意を理解しました。

経幹はこの招待から岩国に帰り「遊江風山月書樓記」をつくりました。
〔「毛利敬親展」七月十三日〜八月二十六日 山口県立美術館にて展示〕



(釈文)

遊江風山月書樓記

安政丙辰秋九月二十二日、従公有於江風山月書樓 是日微雨空濛山容水態變幻改觀 公召有詩藻者撫景言咏聲与棹歌漁笛相聞風流終日歛甚 因亦有所感矣 夫蘇軾一代名臣神宗待之 宜以高爵重祿而神宗反禁可取之爵祿蘇軾乃取無禁之風月可歎也 士之用捨天下安危係焉共 州之貶可以卜南渡之衰矣 今則不然 江上之風山間之月 公既自取以名書樓而有功名臣 得高爵重祿嗚呼明良相遇各得其所國家豈有憂哉 経幹聞之干城名臣操練火技碩礮之聲日震于都城 方今洋夷篠獵猖獗 辺要有警而公膺方面之寄他日或遇犬羊無礼率 所謂操練名臣巨碩大礮一舉殲之 猶赤壁之火攻亦易易耳 洋夷果不足慮也 然則允文允武公平生用意之深此樓足以闢一端坎 経幹從遊觀此盛事感喜之余聊書所觀將以永失不諼

藤原経幹撰併書

要約すれば、経幹は敬親が有能な人材を登用し、防衛に対して備える姿勢に感銘を受けたということになります。安政三年を転機に経幹は幕末の長州藩の出来事に関与することになりました。

(原田史子)